都林泉名勝圖會 四

都林泉名勝圖會巻之四

目録

此一冊彫工 井上治兵衛

衣笠御霊
鷲峯
三笑橋
西源院林泉 衣掛山
綾杉
花園社
妙心寺
法堂
四派松
古鐘黄鐘調
什寶虫干体
玉鳳院 棄君堂
微笑菴 臥水泉

龍安寺
三島
方丈林泉虎子渡し
東皐院
眞田幸村塔
花園山亭
山門
天井蟠龍
雪江松
十景
黄金鎧
花園法皇宸影
開山國師像

鏡容池
水分石
八景
大珠院
同寄附寶器
頓阿法師古蹟
佛殿
毘盧藏
鐘銘
方丈畫
矢根寶劍
拈華室
祥雲院殿魂舎

織田家塔
天授院
古鏡
授翁眞筆
記文
如是院
東海菴
大通院 虎石 硯石
海福院
麟祥院 守天神
芋喰僧都舊蹟
南浦畧傳
一休詩

武田家塔
什寶
古錢
藤房卿髪塚
退藏院
衡梅院
霊雲院
蟠桃院
桂春院
春浦院 福富
大應國師塔
虚堂賛
後宇多院塔

龍馬款上
寶塔
經文切
碑石
壽源院
龍泉菴
聖澤院
雜華院
大嶺院
大光院
安井邑龍翔寺古蹟
大應頌
賀陽門院塔

都林泉名勝圖會巻之四目録 終



高雄看丹楓

満眼秋光画不同
風霜昨夜染山楓
已如霞彩凝林表
又似暾暉掛樹中
鳥怯投棲疑火燎
蝶飛不去訝花紅
賞遊盡日耽詩句
揮筆還羞錦繡工

橘山畑柳啟



谷の流ハ
いよ〳〵白し
紅葉ちるか

浪花 文嶠

高雄
王畿繚
繞景勝
無窮雲
嶂北擁游
目紅楓

桐園主 維明




霞抹青溪落照深
紅楓玉澗夾千林
尋秋何處宜囘瞰
寺在煙雲縹渺岑
百々肇


高雄
地藏院

高雄山神護寺の林泉は洛北の妙境他邦に比類なし寺前に清瀧川めぐりて流れて飛橋をかけて渡す川岸なかばより楓林ありて深秋の頃は紅錦を曝すがごとく人の面までも紅を彩るに似たりけり伽藍に至るまで一山丹楓ならぬ所なし道の側に弘法大師の額書石といふあり これは其かみ金剛定寺の額を大師に書しめ給ひしと帝より勅ありて勅使来りぬるに折から雲霧起て夕立頻に降けれど清瀧川の水増りて橋も危うく見へけるが大師志へし召て筆に墨を含せ此石上より額に向ひて書給へば墨は雲の如く飛んで額の面に降かゝる人々怪と思ふに金剛定寺の四文字現じ勅使叡悦して帰りぬるとなん今に額立石も惣門の東にあり抑当山は和気清麿八幡宮の神勅を蒙りて此所に精舎を草創し給ひ初めは神願寺と号く 淳和帝の御宇天長二年に当山を弘法大師に賜へて改て神護国祚真言寺と称す大師住山し給ふ事六年金胎両部密乗の宗風大に曜く貴賤を度し什宝に大師の筆跡の山水北原風あり〔山水と名付る〕宗儀密灌の時これを立給ふ故実あり一宗みなこれを模して用ゆ之又当山の鬼鐘は世に名高く本朝の名器にして三絶の鐘と称す銘文の撰者は菅原是善卿序詞は橘広相筆者は藤原敏行なり其銘云

高雄山神護寺鐘銘 并序

愛当之神護之寺三宝既備六度無虧唯所有梵鐘形小音窄故禅林寺少僧都真紹和尚始発弘願有心改鋳鎔範未成衣祓早化檀越少納言従五位上和気朝臣彝範悼和尚之遺志尋先祖之旧蹤以貞観十七年八月廿三日雇治工志我部海継以銅一千五百斤令鋳成焉恐年代久遠後人不知仍聊記於鋳側

右少弁橘朝臣広相

銘一首八韻

伝音在器 諸果惟因 尒祖初業

厥孫幸遵宿昔三尺今日千斤
體有寛窄功無舊新山聲萬歳
令響由旬聞宜覺夢扣即歸真
慈周世界感及非人雕琢懸趣
蒙叟當仁
參議正四位下勘解由長官兼式部大
輔播磨権守菅原朝臣是善銘
圖書頭五位下藤原朝臣敏行書
此鐘楼は後世板倉伊賀守の再興之其銘額ニ書ス
當寺鐘楼再興従四位下行侍従兼伊賀
守源朝臣勝重爲驚三有之長眠而使一
切衆生證佛果菩提也

當山地藏院の林泉は客殿の庭中より溪間に臨めば清瀧川潺々と
ながれ尾崎より谷崖まで紅葉ならぬ所なし此折から都下の騒客
あまた来つて遊宴せざるといふ事なし洛北の佳境の其一たるべし

高雄ちるあらし成るつらねやまさくら花を敷る川之　西行法師

高雄文覺上人哥五首添て京極禪門許に持來る其心は孫重く
佛法練行心通和哥之由記録に書載と云々又云文學上人は西行を
にくまれけり其故は遁世の身とならば一筋に佛道修行の外不可他事
数寄をたてゝこゝかしこにうそぶきあるく条にくき法師なりいづくにて
も見あひたらばかしら打わるべきよし常のあらましにてありけると云々
或時高尾法華會に西行まゐりて花の陰などながめありきける弟子ども
是の由を上人にしらせじと思ひて法花會もはて坊へ帰りたるに庭に
物申さんと云人あり上人は誰ぞと問はれければ西行と申者にて候法花
結縁のため參りて候今は日くれ候へば一夜此御庵室にてと申候とて候
と云ひければ上人今ぞおもふ事を叶へつるとおもひて待ける程に
まちかくあかり障子をあけて待ち出るをしばしまもりてこれへ入らせ給へとて入て
對面して年頃承及見參に入度候ひける御為悦入ひよし念ごろに物語
して非時なども饗應して次の朝又齋などとゝのへて歸しぬ
弟子ども手をにぎりつるに無為に帰しぬる事を悦びて上人に

さても通りふかんあひてへかしらうちふりてわかき御あまりしひしふ
特に人閑に御物語しけるは年日来ならへたかひくもと申されはあらはへ
うひなの法師とりやあまたの文学ふうくまんをとる物のつくやうに文覚
をこ怒らしまんを縁着あれと答しけるとし云云
坊中曼陀院ハ中祖文覚上人の住院之後山に文覚の墓あり七月二十日
忌日なり羅山子の書れし高羽戀塚石碑云文覺在高雄
遥望埋婦之處名曰戀塚

類聚國史云
延暦廿四年八月宣勅令最澄師入唐所
受灌頂秘法是大法師修圓勤操等七人
為受法弟子於清瀧峯高雄寺奉為桓
武天皇修毘盧遮那秘法法師亦在其中
共稟灌頂三摩耶戒是則本朝灌頂始興
之日也（中畧）天長元年九月壬申（三代格云九七日）以高
雄寺為定額寺并定得度經業等正五位
下河内守和氣朝臣真綱従五位下彈正
少弼和氣朝臣仲世等言（云云）昔景雲年中
僧道鏡以倭邪之資登玄扈之上厚僧法
王之号遂懐覬覦之心偏邪幣於群神行
権譎於倭黨爰八幡大神瀟天嗣之傾弱
憂狼奴之將興神兵尖鋒鬼戰連年彼衆
我莫邪強正弱大神歎自威之難當仰佛
力之奇護乃入御夢請使者有勅追引臣
等故考従三位行民部卿清麻呂面宣御
夢之事仍以天位譲道鏡之事令言大神
清麻呂奉詔肯向于宇佐神宮于時大神
託宣夫神大小好悪不同善神悪淫祀貪
神受邪幣我為紹隆皇緒扶濟國家寫造
一切經及佛諷誦最勝王經萬巻建一伽
藍除凶逆於一且固社稷於萬代汝承此
言莫有遺失清麻呂對大神誓云國家平
定之後必奏後帝奉果神願粉身殞命不
錯神言還奏此言遣時不遇身降刑獄遂
配荒隅幸蒙神力再入帝都後田原天皇
宝亀十一年數奏此事天皇感歎親製詔
書未行之間遇譲位之事天應二年亦奏
之柏原先帝即以前詔普告天下至延
暦年中私建伽藍名曰神願寺天皇追嘉

先功以神願寺為寺為定額今此地勢沙穢不宜坦場伏望賛高雄寺為定額名曰神護國祚真言寺

神皇正統記云和氣清麿

河内国に寺を立て神願寺といふ後に高雄の山に移し立つ今の神護寺これなり

高雄の紅葉見に行けるに寛耀僧都坊にて
兼好法師にて述懐

紀阿

誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに

梅花無盡藏　万里

溪橋殘楓

洛外秋風溪有橋見楓無處杖支腰晩梢
紅老房々路嘯者比丘歌者樵

遊鷹尾栂尾其地在洛外四五里
着楓之路上往ヿテ有酔僧有飯樵

北斗集　桂林

楓林暮雨高雄道中作

点楓林鴉未栖晩來細雨作新泥幽探不覺雄峰遠行盡仁和更西

黙雲藁　天隠

高雄山口號

紙窓晝暗覺雲過石燈重攀緑蘿一月
徃來岩下路樵夫面熟不誰何

色葉字類抄云

高雄寺は原神願寺と號して應神天皇の御願寺也荒廢中絶の後和氣清麿に八幡大菩薩示現有て興隆す又厥后弘法大師聖跡として眞言教を此寺に傳て本朝眞言を傳る第二番也元慶八年此寺にも寺あるよし国史に見えたり

納涼房　埃嚢抄云今納涼軒あり弘法大師本房とし大師の影像を安す

性霊集

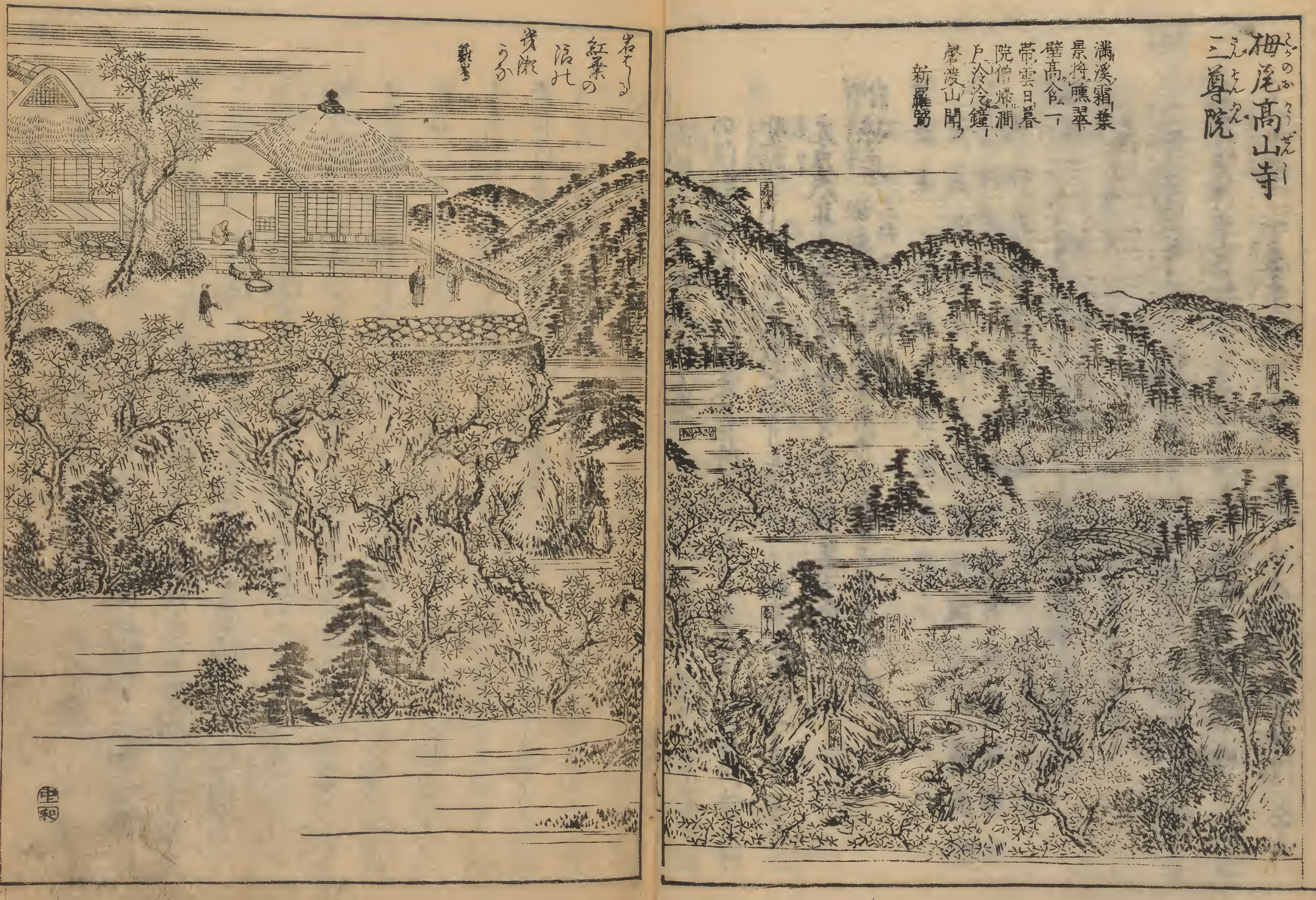
於納涼房望雲雷

雲蒸聲似淺雷渡空如地颯風蒲房祁
雨伴颶天光暗無色樓月待難至魑魅
媚殺人夜深不能寐

猿窟　土人云高雄の東麓にありむかし傳教大師修練の時猿来つて山菓を捧げ御飯に供す

三日坂　神護寺の南十町許若松といふ村に清瀧權現の社あり其社の坂路をいふ

槙尾平等心院の寺號も清瀧川を隔て版橋を以て風色微妙也此寺は舊弘法大師の上足智泉開基之其後泉州槙尾山自證上人重興しより中古より荒廢せしを慶長年中明忍律師再興して今のごとく眞言律院となる



栂尾高山寺 三尊院

栂尾高山寺の林泉は三雄の其一なり同じく寺前に清瀧川のながれをさらく樒の木たち丹楓おほえぬ所なし寺説云上古住吉大神の霊蹟にして建永元年十一月後鳥羽院詔を下して明恵上人を開祖（又の名高弁）として華厳真言の精舎とす本尊は釈尊を安じ鎮守は春日住吉の二神開山堂は明恵上人の影を安じ其傍に廟塔あり春日神影向窟は開山堂の渓間にあり文殊石は明恵上人静坐しましましける時文殊菩薩影向ありて光明真言の法七種の秘印持戒清浄の印を授与し玉ふ所也今に岩面に文殊の梵字歴然たり 仏足石は明恵上人の徳をしたひし今は谷底にうづもれて在跡さだかならず当山の高嶺を五台山となづく練若台は其の最上にあり建保の比上人草庵を結び坐禅し玉ふ遺跡也 当山七所の霊跡の第一之 石水院の跡は今の春日住吉の社地をいふ 第二の名跡之 花宮殿羅婆坊は春日山の中にあり 是迄遺跡の第三 第四 三加禅も其側にあり 是れ第五にして 禅河院は開山堂の西谷にありて此名義は西天伽耶城菩提樹の前に流るる尼連禅河の地勢に相似たるをもつて号す 第六 定心石といふは清滝川の上にあり 第七の遺跡とす

著聞集 高弁上人（明恵）おさなくて此院御室に入れ参りて文学坊まゐりてその小童となりて此児は為人にあらずと相しておはげて此児文学に預りて弟子にし侍らんとゆるしてのちに法師になりて高雄に住せられけるに人々参りてありける夜にも他事をせざりける文学坊高雄を焼かれて番退をせさせられしめける事高弁上人はさる事におもひて聖教のうちにかくれていふべき持て山の奥へ入りて人も通ぬ所にて只壱人の其ほかに益はりし法道が念珠をとりて附山の中より走りいでて其坂七八人が分を登りてとらへて又あらぬ聖教をとりちらして帰入也松山の中に二三日も居て出られ次かくある事一二三日に一度必有けりなる此上人晴夜に聖教を見ひろげて太神基督が子に光音といへる僧文学坊本事は浮て出て人のふるまひに似たるを権者の所為へと覚えひかの上人の弟子にて侍りける年比往住して侍りけるがかくいひけるはさしも

されば秋も冬もともさびしく聖教を見給ふとて弟子どもに志らく
の前に五文取て給へ也といはれけれは程てはされにさびしく来り給ひて
此みにはあらじ志かしのみなもと宣ひたるぬしきさうらし事あり
かくて夕暮に光煮をともなひて此寺の名で今程は心のとむりのとふさ
させ給ふ月見にとて房を出て清瀧川のそこなかくて廿余町ぞのり
此谷の中へ入て大なる石有是れにのぼりて此はいかにも世にある石之
伽藍なぞのこちたる礎にやありけん此石なども世にある名川にゆかり
とくぬくみまであたゝめて手備へのお語しつゝ坐せられたるを
寒くおもひさうらんとてそのうへ上にはて有へしとも覚ぬ有座
一枚をとり出して光煮に志かせられたるふしぎにめづらしき事ども之
彼石をは定心石と名付られけるの後こゝの悟真寺の石に模せ
られたるにて又縄床樹とて松有その松座禅によりあそはら
正月の頃松の中に居て観念せられたるにあられのふりたれを

新勅
岩のうへ松のあらしにすみ深の神はありかれやかけしその玉　高弁上人
此外明恵上人釈尊の霊跡を慕ひなんとて弟子十余人を相具して天竺へわたら
せらんとせられたりしに南都春日大明神より度々さんとてかの所をとし給へ
来られたるに廉六十餘騰をおりて地にふしてうやまひたる事なんどもみえ
たりさてに略に

梅尾茶藍觴　深瀬三本木　梅尾高橋の北の方に古跡あり相伝ふ建仁寺栄西禅師入宋して帰朝の時
茶實を三粒将来し漢の小柿といふ茶器に貯へて明恵上人に贈りてたまふ
即此地宇治深瀬三本木とて今所に植られ天下茶園の初となる其後
宇治里にうつし植る

春夢抄　茶のうたも書る
思ふなく高きうぬ万にはみてとけしとのゝおかの末は新州　明恵上人

海人藻芥云
茶は上古より我朝にあり挽茶節会とて内裏に於て公事儀式を
とり行はるに薬上僧正入唐の時茶の種を渡さる梅尾明恵上人之をもて一服
翫のしへこれを梅尾宇治の名産也

明恵伝記云
建仁寺長老より茶を進せられたるを医師に是を問ふに茶は遠困
消食気快なりしむる徳あり然れども本朝にはまだ普からねば
其實を三粒植初られたるは誠に眠を覚し気を晴す徳あるゆへ衆僧

みな服せしめられしとぞ

寺記云
深瀬の園ハ高山寺の栂尾より東北の地をもつて明恵初めて茗實ハ二粒を植たまひし地ハ因茲栂尾茶を深瀬二本木茶と称じ此園今にあり其茶実ハ二粒入て栄西禅師より進ぜられし茶入と漢小柿といへる当山第一の器なり又云 城州菟道郡蹄茗園ハ明恵上人の園なりそも其前ハ菟道郡五箇荘の内之栂尾にハ寒冷の地にて温陽の地を求め茶樹を移し植んとて上人馬に騎て巡見し五箇庄の内大和田に一ツの園地を得て栂尾より茶樹を分移し植玉ふ其園を駒蹄影といふ歌に

栂山の尾上の茶の木分植て跡ぞ生へし駒乃蹄影　　高弁上人

其園ハむかし菟道殿の茶園之平治の乱に荒蕪となりて其後茶園を久世郡宇治里に移をとありし上人茶を植初めたまひしゆへ古来より今に宇治より毎年新茶を上人の影前へ献ぜらるゝと然

高山寺知事記録云
禁裏御所献茶栂尾諸房目録　地蔵院壱袋　田中坊壱袋　閼伽井坊三袋　東　坊　三袋
中之坊二袋
已上十袋

大樹公献茶栂尾諸房目録　地蔵院一袋　田中坊三袋　中之坊二袋　入江坊一袋　東坊三袋　已上十袋
寺奉行叙尾大和守 白 十袋
叙尾左近将監 白 弐袋

高辨上人書翰云　明恵上人初の名成辨其後高辨と改らる　此書簡今に高山寺にあり
鶴禅房授與師範事奉畏候又兼而仰候茶實未熟候之間今熟候分聊進之候恐恐

　　　　　　　　高辨
　　　　昴時
　高雄上人御房　文覚

古記云
明恵上人ハ栄西禅師より乞得たまへる茶実を栂尾山に植て其茶を製しく時の帝へ献ぜらるゝ岩上茶より茶味勝れしと叡感有て都茗と名之づけられ岩上茶を鄙茗と云栂尾茶を本茗といひならせり

畠山義就書翰云
就御内書之義巻數則目出度候右候連日祈念之驗既著候猶祈禱憑入候仍而茶到来云名物賞翫無極候事々期

来信候恐々
卯月十一日　義就　判
田中坊
此田中坊ハ今の善財院ハ此文高山寺の宝庫ニあり

龍巖集云　栂尾自古産佳茶而未知有名其山及閲清拙和尚集中同夢䆫國師遊栂尾之詩始識古呼為茶山其詩云
幾重峰轉又谿廻行到茶山聴眼開
佛殿東房小樓上夢䆫清拙記同来

西齊詩話云
壽上人回自日東其國所産以梅山茶見恵賦詩謝幸得梅山信初嘗日本茶

天素往來云
梅尾者此間雖衰微之體候名下不虚諺不可忘思召候朝日并深瀬之走摘閼伽井逆淵外畑小畠等云云

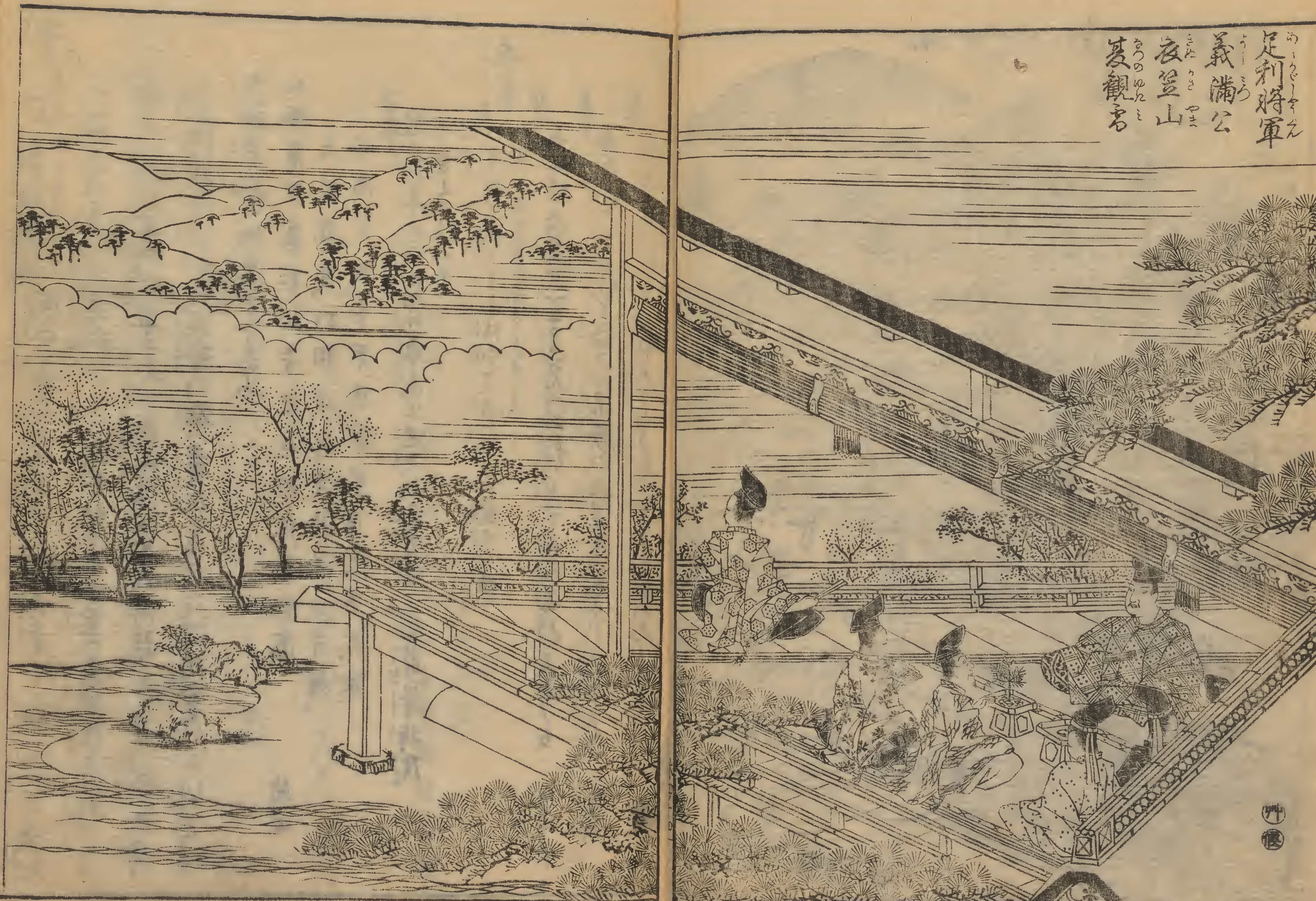
遊覽往來云
茶ハ深瀬小畠天狗畠一瀬外畑岩傳門不見橋返鐘樓花禪河院ト云云

異制庭訓云
吾朝之窟宅以梅尾為本也開山禪師依習禪勤行之障睡魔為強敵為彼退治降伏植茶而為精進幢傳賢首之大教窮秘密之奥談故經云以因分可説果分不可説我益説之真詮為茶之末以為茶之本也過土洛陽之本無有言之秘宜為茶之名山名所如雲如露各誇其家之春雖朝他山之景皆是為城州栂尾和州清滝之末流也　又云我朝之茗山者以栂尾為第一也仁和寺醍醐宇治葉室般若寺神尾寺是為補佐此外大和寶尾伊賀八嶌伊勢河居駿河清見武藏河越茶皆是天下所指言也

茶壺紬狂言云
抑も我主との中國一の法師ゑて鄙の茶なと思事なしいちぞくの寄合ゑ本の茶をたてんと五十石んのへりをのちおほくのかりしをはうちく去庫の津ゑも着きり兵庫を出川て二日ゑ梅尾ゑも着しめて宮の坊谷の坊特ゑ名蘭しゑれ閼伽井の坊は積先を十行斗買ひ此壺ゑうち入うしろふせおふて國をさして下は　下略
近年寶曆中梅尾茗園記抄と金龍道人著はされ略しくまてに出たのを


衣笠山
清漣亭


等持院
夢窓國師作りし



足利将軍義満公衣笠山夏観雪

等持院 葛野郡等持院村にあり。開山は夢窓国師にして天竜寺十刹の内なり。林泉に芙蓉池あり。風色雄雅なり。足利家代々の昭堂は慈照院義政公の建る所、其后足利将軍十三世悉く木像安置す。佛殿の本尊は釈迦佛、左右阿難迦葉、中央果證の額は尊氏公の母公の牌所、登真は同公の室也。霊寿は同息女なりといふ。

五鳳集云 暮春北寺看花時住等持院　蘭坡

天公省支巧相違　北寺花多南寺稀　百萬買隣今不悪　袈裟角裏落紅皈

太平記云

延文三年四月廿九日尊氏公逝去に衣笠山の麓に葬等持院に

今方丈の後山に塔あり

衣笠山 等持院領にして、後山之又西に至つては龍安寺領也。古人衣笠岡と称する事多し

続古今

春にけふ衣笠岡をすぎくれば待つてぞ花のちりもあれける　読人しらず

新古今

はふれしのぶのかはさるる早蕨や衣笠山の春しるらん　為盛

名寄

まだれさむき山の夕ぐれ立のはるみも袖ぬれまさりあり　為秀

衣笠殿 今の等持院旧跡なるべし。正二位藤原家良公の別荘也。園太暦文保二年ノ記云、仙洞此間御衣笠殿云々

増鏡云

文永のころまで生き給ひし前の太政大臣、後嵯峨院の更衣衣笠の宮様かしこと云、仁和寺に衣笠といふ所に住給ふ

帝王編年記云

永仁六年七月十九日天皇行幸衣笠殿

正安元年九月九日法皇於衣笠殿有如法経十種供養事新院御幸

中務内侍日記云

ゑまんさうりん院の御所きぬかさどのへ九月十二日にまゐりされたへく、おほくきうほう院の山みえくまのかはらんなどみあり

新後撰 正安元年九月のころ衣笠殿にて御如法経かきし時三七日の懺法ことひきの川つきこ日にまつりく名残をしておぎアイの人の返事に

われならる暁おきの鐘の音をきくつよりかなるおもひらはしき　法印憲基

衣笠岳御霊 六所明神と称し、松原村等持院門前の産土神として則祭、衣笠山社を鎮守とす

夫木

神祭る衣笠岳の岩の松久しくたてれとこへかさされた　隆房

拾玉

この山はきぬかさをかにせりはさく神のまもりのかからもせん　慈鎮

龍安寺
方丈
林泉

むかし細川勝元こゝに別業あり、かの人住せられし時書院より毎朝男山八幡宮を遥拝せんがために庭中に樹を植ず岩巌をならべて風光を催す。これを桐陰の渡しと名づけて虎の子わたしといふ。洛中名庭の第一なり。後年塀の外に古松多く植て昔の風景となる。其上近年方丈回禄しあれば、むかしを慕ひ情を慕ひ侍る

一庭空曠白砂平
頑石誰鋪形勢成
宛似昔時渡渓虎
分呴兩子泛波行

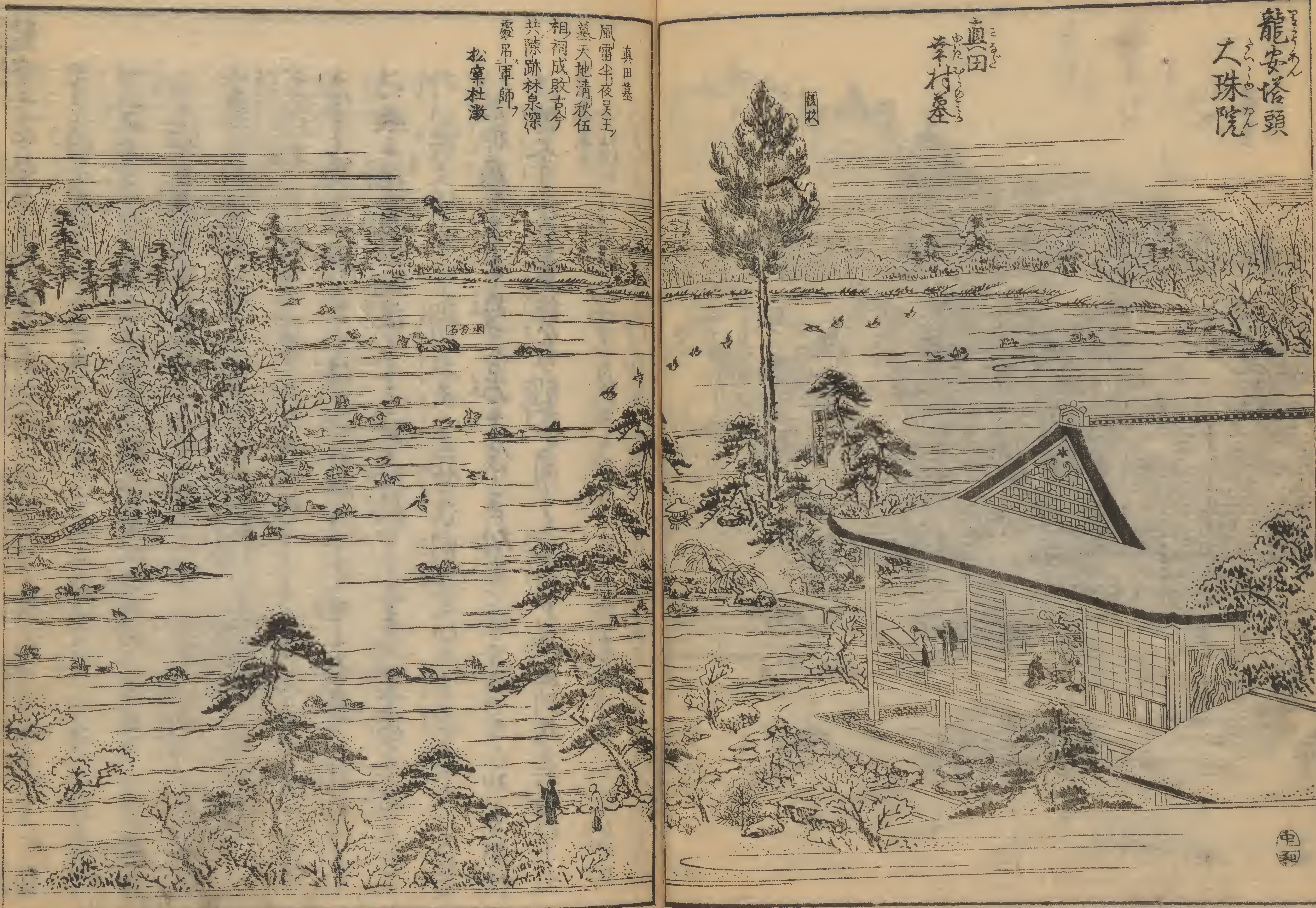
皆川愿




龍安塔頭
西源院（さいげんゐん）
衣掛山
月をし
衣笠山の
雲れうく
蘿嵩
中和

龍安塔頭
大珠院

真田幸村墓



真田墓

風雷半夜呉王
墓天地清秋伍
相祠成敗古今
共陳跡林泉深
處弔軍師

松窠杜澂

龍安寺の林泉ハ封境に名池あり鏡容池と称し冬日鴛鴦多く聚
まる洛外の眺望世に名高し池中に二ツの嶋あり中の嶋ハ伏虎ともい
ひ又水分石ともいふあり霖雨の時此石上へ水越ぬれども西の方ハ樋ハ
上ぐ水ハ落ざる三笑橋といふハ東の方にあり当山に八景あり是ハみな
方丈よりの遠景をいふ風趣とぞ　雲山帆松　衣笠紅葉　東山仏閣　淀川長流　八幡源廟　東寺寳塔　伏見城址　花園春濤
所謂方丈の庭ハ相阿弥の作にして洛外名庭の第一とす凡
庭中に樹木一株もなく海面の躰相にして中に奇巌十種ありて
嶋嶼に准へ真の風流にして他に比類なし また世に虎の子渡しといふ
抑此地ハ文明年中細川右京大夫勝元の別荘也此人書院に坐して遥に
八幡神廟を毎朝拝ずんが為に庭中に樹木を植させざるよし初め此地
後徳大寺左大臣実能公の別業也同じく公有公の代細川勝元に譲れし

著聞集云
文治の比後徳大寺の左大臣にておはしける時徳大寺の亭に作庭ありて其ハ附
かまへられし中御門左府へ安楽門中されたまひそのあひだに其附

三条の左府入道ハ右大臣中山相国入道ハ別当にておはしけるおのおの
扈従しあひたり亭主も興を用意してひと人々精撰させる侍六人にかて
帯ぬく左府の車をそこへむかへにおくせられけるが志ありけるにのがれ
申されたまひしもあながちにさしかれたまひてのりて泉えハさなりけり　中略
其次日北院の御室威法寺法印をそ寺中にさしつかひ給ひける此事を
志りて逍遥の事也と申されたまひしを清水寺にかへらせのおはしまし小泉ハ
かまへてひふた府をしられハ入御ありてめんかくのよし申されたるとなん
盛のまく渡御ありたまひ

塔頭西源院と今假方丈と使　延年方丈旧融に羅れたる後に　釋迦迦葉阿難の三尊を安
じ開山日峰和尚の像を安じ襖の画ハ中ノ間狩野金極彩色の仙人畫東ノ間
竹林の虎西ノ間琴碁書画杉戸　表　象　裏　亀倶に狩野永徳の筆也又此院の
林泉又風流にして上段の地に茶室あり額蔵六いと書し正法山
桂南の筆也当寺の後山絹笠山めぐりて旭日の壮観あり

塔頭東皐院の林泉は遠景を興とし座中よりして八幡山崎淀川のながれ
小倉の江伏水鳥羽羽束師なども鮮にみえて風光微妙也
同大珠院の林泉は鏡容池西の方に巡りて庭中の景となる池中の嶋に
石橋ありて嶋の中に綾杉といふ名木あり株の皮目に塵ありて綾綺
に似たり葉は尋常の杉に等し高サ二丈許京師の珎木也其木下に蘋墓
あり中に真田左衛門尉幸村の墓あり五倫の石塔婆を建て法號を鐫ぞ

幸村法號　大光院殿日道光白大居士
幸村ノ室　竹林院梅溪永春清大姉

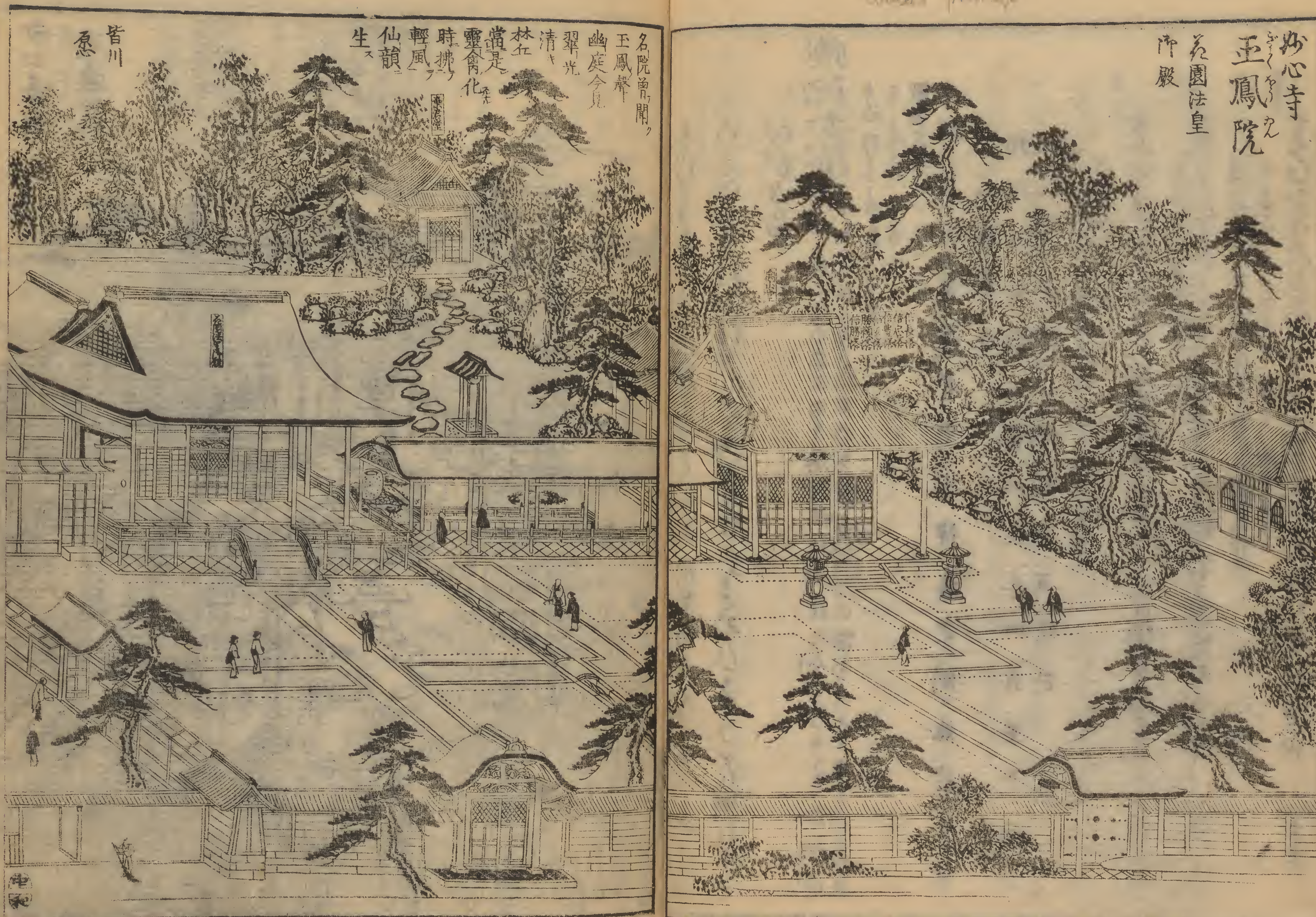
又当院の牌に慶長二十年乙卯五月七日没
幸村の娘の牌に真嚴院法樂宗蓮大姉此人は石川備前守の室家にして
真田氏の家系に添て什宝と寄附して今当院にあり
○普賢像兆殿司筆　○布袋画宗達筆　○唐画の鹿筆者不詳
○金紙屏風一雙　○鷹画金屏風一雙　○軟鍛の錦　洲濱形
龍猿の繪あり其外に道具数品あり　きくに昔は寺説に当院は
石川備前守の菩提所にして太平の後親屬の因により
ちくに建らけく
とぞ　けえとし

花園社　妙心寺の南を町許路傍の南にあり　祭神花園左大臣有仁公なり
續古事談云　土人今宮明神と称して生土神とす
後冷泉院の御時世の中さわがしかりける時並園の為に社なく爾うだ
志川ゆかる者して示現ありて去来府生時重をはじめて兵清府
のまゑのもと社をはぐりて御霊會なるをとおこなひあり花園社とぞ
よびける

頓阿古蹟　旧跡は妙心寺の西にあり頓阿法師山荘なり今さらになし今時
洛東双林寺の内にあり蔡花園院の額ありなくの古跡なれ
りのおぼろけん名ある事に
にかんえぞり

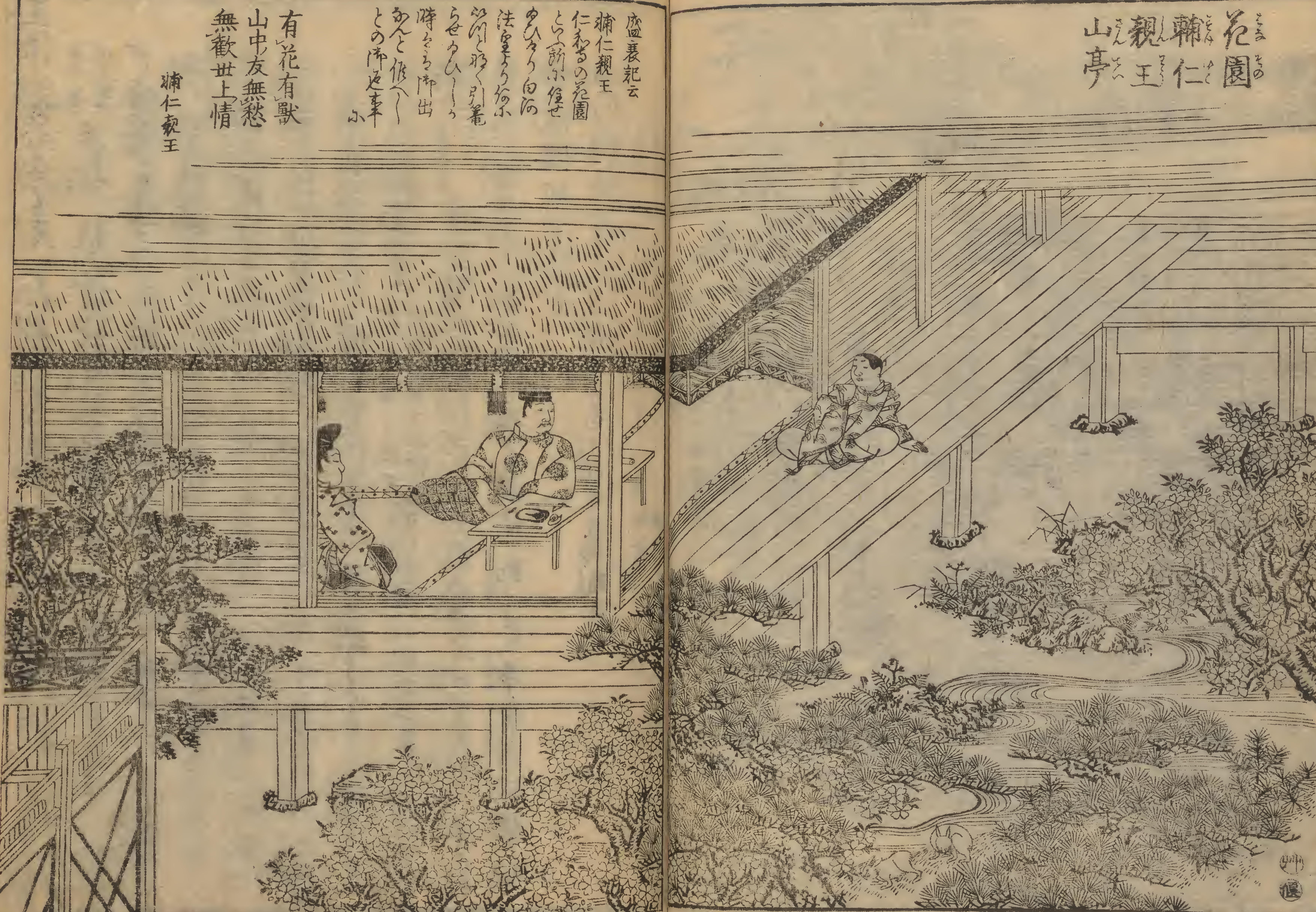
迎陽文集云
柳く蔡花園院者平生棲息之閑地終身安
山之幽荘也
頓阿五旬願文應永五年四月弟子法印
大和尚位權少僧都經賢敬白

花の比関白殿蔡花園にいらせたまひて
山の花といふ事を人々よませられし時
新拾　ちりかゝる花の木末やあらしをも花さく山の陰ふきかへす　頓阿法師
同　仁和寺の蔵宝にて
花のうへをふくさくこそ出しかれ都にちりぬ山のあらしは　同
家集　蔡花園に侍りて法事の後御室本守の
祈ありての花などひらき晩景して
ぞくひある花を盛なる人ぞうき身さへひらけみ山の花の陰に　尭孝


妙心寺
玉鳳院
花園法皇
御殿
名院曽聞玉鳳聲
幽庭今見翠光清
林花當是靈禽化
時拂輕風仙韻生
皆川愿


妙心塔頭
大通院
當院の林泉ハ奇樹奇石多くしく山塔中第一の名をあり一代の住職湘南和尚四方海嶽よりあつめ庭を作りし也
湘公豈志故丘情
遊戲径年一小瀛
樹石千般従甲浦
山川萬里輸京城
白沙無水分洲色
楯峙多松弄海聲
鮮道飛峯不胡説
園中幽趣擅佳名
三浦世纉


大通院
其二
苔深石逕掩
喬柯返景照
林嵐翠多野
鳥時傳虛谷
響山庭疑是
坐雲蘿
百々峯


花園輔仁親王山亭
盛衰記云
輔仁親王
仁和寺の花園
といふ所に住せ
給ひけり白河
法皇より何に
御心を置く引籠
らせ給ひしか
時々は御出
あれと仰へし
との御返事
に
有花有猷
山中友無愁
無歓世上情
輔仁親王

正法山妙心寺ハ花園法皇の離宮也（人皇九十四代花園天皇と称ス後深草院の皇子後伏見院の猶子也在位十一年聖寿五十二歳）其初ハ後二条院の皇孫花園左大臣有仁公の別荘也其後斎相継て伝領せり然るに花園法皇此地を愛したまひて離宮として性禅法に帰し此所に閑棲し給ふ時に信州高梨高家の孫に恵玄といふ僧あり相州鎌倉建長寺広厳和尚に謁して薙髪し洛北龍宝山大燈国師に法嗣をうけ 法皇離宮を捨て恵玄に附属し詔して開山国師と称し当山の開山とす 法皇ハ伽藍の東に一院を創して常に禅坐し給ふ これを玉鳳院といふ（これより先キ皇居を萩原の別宮に移す）開山国師ハ延文五年十二月十二日寂す年八十四 第二世授翁和尚登哭して大衆に告て丈室に昇入し山の艮の隅に塔を建て微笑菴と号す 其後 勅して本有円成仏心覚照国師と諡す

○山門 慶長四年三月鉄山和尚住山の時成就す 茶旦の偈を作つて曰

鳥藤拍手叫令辰五百僧房万物新
東庵ハ歌花西庵ハ月山門起舞洛陽春　鉄山

○仏殿（滝年和尚住山の時天正年中鉄船和尚創建を潤色す）製して詳く 本尊釈迦 迦葉 阿難 脇檀に建つ 紅梁の縁は繰の 須弥文開山国師の牌 大燈国師の牌等 厨子に安す 次東乃方 大元帥 韋駄 地蔵菩薩の像 其外 将軍家神牌を安す 次文 花園院 後花園院 後土御門院 後柏原院 後奈良院等の御牌を安す

○法堂 初ハ法堂なし開山三百回忌の砌建立す 伝云 此堂乃本末等ハ大木の松二本各長サ九間半末口の径五尺五寸 鉄ハもと日向国より此大木を求むる事海中に板を流し左右に針し海中を浮め舟子数十人木の上に在て櫓を揺して左右に船を浮めて是を繋ぎ嘯風に任せて大坂の河口に入津し それより淀川を引登り淀の城下より車に乗せて牛七十頭を以て是を引く 禁裏宮ハ向へ附の所司代板倉伊賀守殿の講所をうけて二条城の馬場を牽下立売より妙心寺に到る 京師町小路の老若あまた群をなし半町其大木の上に在て木遣の音頭の者おのおの三三弟といふ いとまなくあれども其木遣の音声を出して人々是を勇ましむ 図之を遂に肆街に流布し 此時の運送に此附の人これを図絵に画き彫刻して 此堂の柱ハ若林紹隆といふ人富士山の麓より伐出して悉く寄附す

覆檐画龍 法堂天井の画龍ハ狩野探幽法眼守信の筆なり 其ほか一山の大衆議して曰 洛東東福寺法堂の龍ハ初メ兆殿司紙に画て板上に貼し次年久しくあり 風に吹れて破散す 今ハ狩野光信が筆なり 当山も直に板上に画きたる人と守信に乞ふ 彩を施し眼睛を点せし日 俄に風雨 墨を揮ひ毫を 堂乃

氣色たゞならず人みなこれが靈異とし其謝恩として白銀
弐百枚瀬欅十擔が餘尚探幽初意に思ふハ此謝儀あらば
千枚二千枚にも還すべし忽ちこれがたくく落ぶとく表謝く
受納せず衆僧又議しく三千枚を餘尚探幽恩が謝く受ず
しく云初メより畫勞が當山に喜捨して一毛の謝を受ず
と辭退く弟子えく去ル此畫誌ハ古今中算の珍ふしく從た
此山を故かし天井画龍の規範とせる之天慶の乃
李懐仁が畫龍も亦美が擅り獲し此龍の筆蹟都く
日本に於ず
そのめし

○毘盧藏 法堂の東にあり當山の經藏之額ハ 伏見院の宸筆
毘盧藏の三字がさくに掲る此堂の再建ハ元禄九年
大坂淀屋巨庵といへる者黄金一千両を
寄附して建る所なり

○四派松 佛殿の前にあり いにしへる柏樹を植より今四松あり
當山に龍泉派東海派靈雲派聖澤派乃四派
あり故に
名とせり

○雪江松 佛殿の東にあり 老樹の大松屈蟠の枝蒼々としてく
當山の開觀之初メハ衡梅院の內にあり伽藍東西に
開く時此松外面となる 當山六世雪江和尚衡梅院に住職
しまふりへ名とせり

○鐘樓 經藏の側にあり

凡鐘者欲令聲大故必作蒲牢造鯨魚以
擊之則大鳴矣今茲清和天皇十代山
名氏義範公之后裔十六代豐國公法名
禪高其仲子豐義公其阿娘天祥院殿茲
雲妙大厥慈母者木曾氏也妙大欲以有
為財修無為果鑄巨鐘用寄附吾山其蒲
牢也吼正法月則打破百八煩惱其華鯨
也聞洛陽城則驚散八萬聽魔曉韻傳精
舍晨音微梵天聽者得三德觸者解十纏
鳴呼這箇耳功德至矣盡矣加旃慈干森
上座請銘不得辭厥銘云

見鐘在簴　內空外圓　樓臺高聳
虛谷聲傳　鳴依小大　德以聖賢
陰卜煙雨　晴吼霜天　破愚蒙睛
驚煩惱眠　洪音無盡　信力彌堅

萬治貳己亥年霜月念日

正法山妙心禪寺住持比丘森巖叟銘

○西鐘樓 方丈の西にあり 黄鐘調大鐘 此鐘樓に掲る鐘の中に銘あり 甚古代の作なり其銘に曰

戊戌年四月十三日壬寅收糟屋評造舂米連廣國鑄鐘

右都々一行廿二字ニ鐫ど戉戉の年暦分明ならず 糟屋ハ筑前州
の郡名なり 評ハ地名 造ハミヤツコ 春米ハ氏なり 連ハムラジ
広国ハ名なり 寺説ニ云 此鐘ハ嵯峨浄金剛院の鐘なり 此寺
久しく荒廃して鐘も民間の手にあり ある時妙心寺の僧
と聞く京師に出る者あり 関山国師あまて見 其
鐘ハ何れより何処へ持ゆくや 鐘主の云ク 是ハ嵯峨浄金剛
院の古跡に棲く 農くし此鐘 村中にて久しく持伝へしが 今日
京師に出し 農具鍬の料に交易せんと為 持ゆく 国師
聞て 是寺にいまだ鳥鐘なし 我に譲りて与へよとて 類
ふへぞ農人に 僧金を以て贖て 嵯峨へ帰る それより
国師嵯峨に至りて浄金剛院の鐘なる
事を知らしめて右に掲出あり

嵯峨古図抄云
亀山殿の東に芹川殿 艮に萱殿 小北殿あり 其北に浄金剛院
小殿の西に寿量院あり 其西に栄艸院 其北にあるハ法華堂あり 大橋
社の東に河端殿の御所あり 今の芹川ちの地に当まり云々

嵯峨志云
橋の太后此堂をたてられし檀林寺と云ひしが 今ハ破壊して礎
むかしにありしハ其の後に浄金剛院と以て仏堂を建させ給ひしに
道観上人を長老になされて浄土宗をおこせ給

玉葉 浄金剛院にてよませ給ひける
いく里か嵐につきて坊ゆらん夕暮の寺の入相の鐘 後嵯峨院

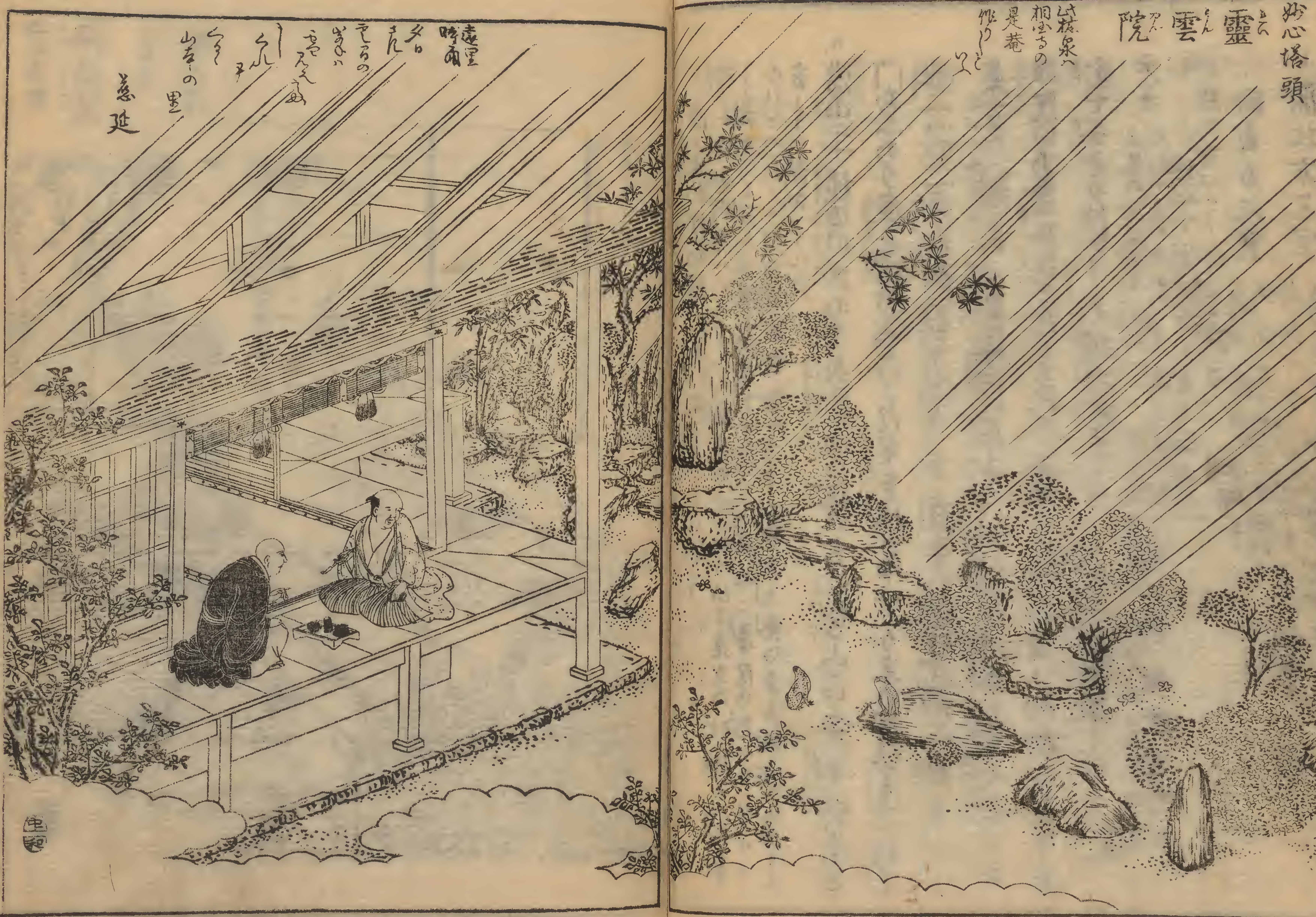
つれづれ草云
浄金剛院の鐘の声又わうしきてうなり
按るに浄金剛院ハいにしへ天龍寺の地にあり 此寺建立の時 院ハ荒廃
し古跡のミ残まる故に旧号をとりて小倉二尊院の内に再営せり
これをつれづれ草の註書鐵槌につまびらかに山の南太秦の東に旧跡ありと
書しハ謬なるべし

○当山に十境の風景あり 亀頂山ハ乾の方仁和寺山とぞ 高安灘ハ南の
門おもてにあり 度月橋此流にかゝれり 宇多川ハ当山より東の方に流る 鶏足
嶺ハ山の山南 萬松ハ南方遙にして東寺の塔を遠眺す 斎宮杜ハ
東方の川端にあり 蒼精田ハ当寺の内 花園の旧跡 百花洞ハ大
雄院の南 恵林院の北の方に深谷を以て 麒麟窟ハ花園法皇の宸
影を安ずる所にして 麟徳殿とも号して 王鳳院の中にあり 已上十景

○方丈 法堂の北にあり 唐門ハ大原和尚時建 方丈東の廊
天和三年南より移して點心寮と作り 勅使来駕の時
あくなく點心を進む 方丈東の探幽ハ
客殿紙立てしく響應次

同南方三室
東ノ間 中ノ間 探幽筆
西ノ間 采女 益信筆 洞後号 洞書

同北方三室
東ノ間 中ノ間 狩野主馬筆 西ノ間 探幽弟子 叔誉
西南ノ間 探幽筆 北西間 采女筆


妙心塔頭
霊雲院
此林泉ハ相阿弥の是庵作りしといふ
遠里時雨
夕日さすそなたの空ハ晴なからしくれてくらす山崎の里
慈延

Round seat

Cover on water basin
Towel rack

Chinese seat (barrel)

妙心塔頭
海福院
名画
猿之圖



むかし妙心寺の
法堂の蟠龍に
狩野探幽書れ
し时海福院
に滞留せられ
折節住持の
長老なるものは
探幽酒をこのみ
く酌んで戯れし
に新しき唐紙
を張し襖の
うへにも何か
庵の猿また一の圖を
書れしく住僧深く
秘まゐらんとて探幽に
折檻を加へ探幽詞なく
しきく謬てを届られける
後世は筆蹟妙なるとく
まする状賞しを画工
猿画しの規範となれり



妙心塔頭
雜華院



山林泉ハ
日蓮宗僧
玉淵の作と
いへ庭中れ
奇巌の像
十六羅漢を
表するとぞ

妙心寺方丈虫拂体

花園院　宸翰
花園院　南都
後水尾院　應無
後水尾院　拈華和歌
後水尾院　而生
光明院開山國師號綸旨
後西院勅感綸旨

○東室间上段

後西院再興綸旨
正親町院居成綸旨
後柏原院紫衣綸旨
後土御門院再興綸旨
後土御門院宗門勅額綸旨
崇光院開山再興綸旨
桃園院國師加號綸旨
東山院國師加號綸旨
後西院國師再號綸旨
後奈良院國師號綸旨

花園院宸翰　[illegible]
花園法皇御影
同
花園院宸翰　往年
後奈良院宸翰

○花園法皇御存生の日自ら像を畫かしめ給ひし物なれは要ありて修理を加へ圖して其後に御影として世に遺さる故に後人奉て妙心寺第一の至寶とす

開山袈裟　一箇
同　掛絡　一領
同　布衣　一衣
同　七條　一服
同　傳衣　一服
金襴二十五條　一服

○右東室间

櫻町院宸筆御製
附き〳〵の光りそのまゝにあれとかく
みるも〳〵の風のまに〳〵

開山　藤環
同　葛籠
祥雲院殿　尚宗　劍　一振
同　堆朱道具𣪘殻呂
同　碼碯鉢盂　壹

○祥雲院殿ハ太閤秀吉公の御嫡男棄君の法号なり以下ホ同じ

大應國師像　寧一山賛

虚堂和尚像　自賛

大燈國師影　自賛

関山國師新大應國師字

右三幅對

豊干和尚像　李龍眠筆　閲億渓賛

達磨大師像　門無關筆　禮虎翁羽賛

布袋和尚像　李龍眠筆　閲億渓賛

龍圖　楊月澗筆

大燈國師與関山國師印證

関山國師像　玄江和尚筆

関山國師與授翁和尚印證

虎圖　楊月澗筆

○東室次間　總張附山水狩野探幽筆

羅漢像　八幅　兆殿司筆

同　八幅　同筆

大慈禅師墨跡

鶴圖　徽宗皇帝筆

孝賢像　馬麟筆

鶴圖　徽宗皇帝筆

朝陽　梁楷筆　冲凝絶賛

達磨大師像　顔輝筆　明獨孤賛

對月　梁楷筆　冲凝絶賛

右三幅對

臨濟像　大慈和尚賛

○西室ノ間　總張附狩野益信筆

布袋像　牧溪筆

拾得　默庵筆

寒山　默庵筆

初祖画像　曇西硐賛

二祖画像　同　賛

三祖画像　同　賛

四祖画像　同　賛

五祖画像　同　賛

六祖画像　同　賛

左右十六羅漢　祭山筆

觀音像　思恭筆

山水圖 唐伯虎筆
憨山徳清 墨蹟
山水圖 唐伯虎筆
釋尊乳供像 呉道子筆
山水 牧溪筆
觀音像 牧溪筆 無準賛
達广像 古法眼筆
觀音像 牧溪筆

寒山 然可翁筆
觀音 同筆
拾得 同筆
鐵拐仙人 呉章小仙筆
柳々美人 呂紀筆
仙遊圖 文徴明筆
山水 石鋭筆
花鳥 呂紀筆

〇西室次ノ間
襖張付 探幽 安信 両筆

老子騎牛圖 呉秀泉筆
姚仲臣 墨蹟
山水 孫君澤筆

〇小方丈 花鳥圖 丁山尚景画
〇杉戸 花鳥 同筆

龍 探幽筆
維摩 同筆
虎 同筆
右三幅對
出山釋迦 探幽筆
達广蘆葉像 益信筆
趙子昂墨跡
人物 東坡筆
同 同筆
同 同筆
畫錦堂記 紙縫字
醉翁亭記 東坡筆 石摺八幅

〇食堂

屏風 四睡 六面 三酸 六面 龍梅 六面
虎竹 六面 倶々 友松筆
三笑 二面 巌子陵 二面 共々友松筆
傳云友松ハ元ト永徳が弟子成りしが或時
友松師の筆画を盗ム永徳之れを知りて
怒ッて友松を擯斥す是以友松別に一家を
出して永徳が筆意を學べり筆勢妙なり
屏風 櫻 六面 紅葉 六面 永徳筆
屏風 雁 六面 鶴 六面 土佐家筆
此外永徳已下雲谷三樂等筆画の
屏風数十ヶ品あり略之
松鶴画屏風 狩野松栄筆

妙心塔頭
蟠桃院




妙心塔頭
大嶺院
當院の林泉は藤村庸軒の作とぞ

○後水尾上皇宸翰
ゑミの眉ひらきし花ハ梅か桃か
亀年和尚開山関山國師二百年回之時香語云
一枝ノ微笑梅カ耶杏カ

○豊太閤秀吉公御子秀君御持物
黄金作産衣鎧　一領
惣金細工緋威

○寶剱　秀君御守刀鞘ニ黄金をもつて倶利迦羅不動の像を
後藤祐乗が作なり鐫彫を精妙比類なし　長サ七寸八分
傳ニ云此寶剱ハむかし俵藤太秀郷所持の鍛なり云
近江國勢田橋ニ於て蜈蚣を退治其矢根ハ寶剱
なりしか代々秀郷の後裔蒲生氏の家ニ傳来後蒲生
飛騨守氏郷ニ至つて秀吉公の羅を蒙り奥州會津
若松の城主として知行九十一万九千石を領ス次秀君出
誕の時吉瑞の名剱とて秀吉公ニ是を献ず豊太閤
喜悦ありて秀君の御守刀とし給ふ秀君二才にして薨去
の後遺骸を祥雲寺ニ葬む此寺ハ大佛今の智積院の地
なり祥雲寺廃して後東山妙心寺ニ移るを故ニ宝剱鎧兜
及び装束等の品ぜんくみな此寺の什宝となる俗説ニ云蒲生
氏郷此宝剱と献ぜしより蒲生家年々衰へて終ニ
其子息秀行の世ニ成て會津を没収せられ左て予州
宇津ノ宮ニ於て十八万石ヲ
賜ハりしとぞ

○玉鳳院　法堂の東の方南面之　初メ此所花園法皇宸居の御殿なり崩御の後
院號に改し宸書の尊影を安置し南面ニ唐門あり　詩説云大坂役ニ右門たまふ此
太帝金にて散して　麟德殿　満寺の方丈をいふ唐憲宗帝の
名義を擬して初メ此地ニ麒麟閣ありし
名義ハ漢の宣帝功臣を麒麟閣ニ圖し雄名を賞じ漢書の註ニ
麒麟閣ハ蕭何が造る所にして秘書を蔵む

麟德殿　東ノ間　山水　中ノ間　龍　西ノ間　桐ニ鳳凰　永德筆

法皇宸影間　法皇宸筆額玉鳳院と書り
横額ハ唐戸の上ニ掲ぐ

花園法皇宸影　坐像法服を着給ふ黄袈裟を掛玉ふ袈裟ハ紋八ツ藤
右ニ念珠左ニ扇子御長サ弐尺七八寸許

後屏ニハ二片の圓屏あり縁黒漆地板金濃にハ段階二級黒漆長押
の上總花菱金濃其四方ハ黒縁其下ニ唐戸四枚地黒漆ニして鈿螺
をもつて畫を作る四幅對のごとし諺ニ云此唐戸ハ唐玄宗皇帝の寢
殿の具なりと云傳ふ戸の内ニ木引あり花色地ノ錦中央ニ紅の善髪を
掲ぐ其内陣ニ宸影を安置し左右の間の口弐間の外ニただ右南面ニ一間丸欄
あり内金濃口黒漆の障子其東ニ安置るハ　将軍家御代々神牌西ノ檀ニある

祥雲院殿畫影 寺號白衣坐像なり又秀吉公の御子棄君の影像なり
秀吉公 武田信玄等の牌を安置す檀の前中央に紫銅二重寶塔あり
高三丈 其中に唐木の厨子黒くして脇本の像をたるなり
許 西に南無観世音菩薩乃文字
あり此字は 後水尾院の御爪にて南都圓照寺宮文守尼公の御細工之
此尼公は後水尾帝第二皇女御母一位局四辻大納言公遠卿の女なり 后 後水尾帝御贊水入をり何く此佛号の
後光に准しすへ

◯枯華室此所法皇の玉座之 右方丈東檀の東方弐間の御間 額 枯華堂 横額 玉江和尚筆
此間は六畳敷入側ノ口 東面長押の上に掲る 間の内に壁東方にむけて床あり金張附畫は萩芙蓉
右の方袋棚畫は枇杷。桃。桃。葡萄 玉信筆 其下違棚 金具黄金 中臺亭疊上
に褥ありまた宸坐なり

◯開山堂 方丈の東にあり 額 微笑庵 横額 玉江筆 開山の像を安る所は別に作つて側
西向に檀あり碑の歩わたれ板高サ五尺許 亀趺に立 傍にあれは開山國師の行状記を彫刻す其北高サ三尺段階四級欄干擬宝珠共に黒漆肉
戸扉は引緋地唐織中に紅の華鬘をかくる内の中茶高サ三尺ともしろ
小圖像三枚をかけ高サ六尺許

開山國師像 長三尺余 倚子に坐せる 法服は緋地飛紋の純子 右に竹篦を持 此像は彫刻の名作にて國師の頭を剃て其面貌を写しける所 めしたまひしの人これ作りける也 未だ自然の出現にして尊き物の影なれば
毎朝手水を奠へ又菓子鼻紙を供ふ

一休拝開山塔頌

荒艸不鋤乃祖ノ玄 涅槃正法妙心ノ禅
杜鵑叫ト落開山ノ月 誰カ在ニ華園躑躅前ニ

◯涅槃堂 同所東の方西向にあり小堂内敷瓦 紫銅涅槃像 長三尺許 像面四尺にある画像の ぬし人面みな滅金をり付く
影像に祖師の
牌を安に

◯祥雲院殿魂舎 同所の西の方 南面にあり 棄君像 長三尺六寸許 白衣にて着し船に
棄君平生玩弄なされし其之傳云棄君三歳の時伏見城中池乃畔に此船を
泛め遊びのひく給ひ墜溺しく薨れなりしとぞ 祥雲院殿
玉巌麟公神童と号に秀吉公の御子なりしく秀頼公の御舎兄
名を八幡太郎と称す御母は淀井備前守長政の女にして秀吉公
の妾たりし棄君を產む何伊賀をとりけく御に秀吉公五十
有余に逾たまひくもうくめくく棄君を得ありし御悦限りなく寵大ふき
をりし海内列國の諸侯參賀をして祝賀を献ず祥雲寺初めは
東山の養大佛殿の南今の智積院の地にあり棄君早世の時御菩提
所として建立し南化和尚を開山とし其次は其藏主を
住職とし南化入寂の後其蔵主に附属しけり此人年弱にして南化
織田常信の子にして秀吉公の門族なりしく此人年弱しく南化
の法子海南ちてが代りて海南祥雲寺が寮へく郎住乃

逆意ありて妙心寺の南化派起ツて海南點撰し退去なさしむ其蔵主も法嗣立がたくして遂に還俗し旅足を擯し祥雲寺堂席となりしかば関東将軍家の厳命ありて禅宗を変じて真言新義の本寺と再興ありて智積院と改む故に祥雲院と妙心寺に移して棄君の遺物妙心寺宝庫に蔵るなり

○風水泉 玉鳳院にあり 名泉潑潑之

○信長塔 ○信忠塔 ○武田信玄塔 ○同勝頼塔 信玄四男

○信勝塔 勝頼一男 ○信豊塔 信玄弟信繁の子左馬助と号す

妙心寺塔頭

○天授院 妙心寺第二世授翁宗弼和尚は天授院の開基と伝て云 云授翁和尚は俗姓万里小路中納言藤房卿なり建武二年三月十一日後醍醐天皇八幡行幸の附供奉し龍顔を諫て遁づきまつらせ余所から脱し還幸の道より侍士壱人を召具し窃に忍びいりて北山岩倉といふ所に赴き不二房として僧と戒師として多年の儒冠を脱く十戒持律の法師乃身となりせしに事太平記に詳なりそれより東西の国々へさすらえ後遂く都に来り俗姓を密し関山国師の法嗣として授翁宗弼と号し妙心寺第二世と成老後近江国石部の水口の館妙蔵寺とて幽棲し座禅の窓に風月に遊び楽しみ延文の林泉に数るまで勝のおひ漢後小影ト延 二年十二月廿八日遷化し給ふ八十五 勅諡神光寂照禅師 今に遺忌あるひハ祥月忌日に万里小路家より使者ありしぞ見へし 藤房卿の書あり和歌もあり 妙蔵寺の什宝とん 東海道名所図会にも妙蔵寺出せり

抑藤房卿遁世して後諸国を経回して弐拾余年ふりて南朝正平十二年 北朝延文元年に当る 六十二歳の附妙心寺に入て関山国師に法を嗣く授翁和尚と称し第二世となる殊ハ本朝遯史大日本史羅山子賛高泉の禅林僧宝伝太平記二忠伝等に分明なれバ独深艸元政の隠逸伝にハあれを暁せり是様るに其頃南朝日を追ふて微にして尊氏将軍権を擅して威勢ますく熾之顧に高傑の隠逸なれバ人多知らまん事を厭て名衣服を姿を変じて諸国を修行し洛西に来て関山の法嗣と成て双国の東なる池上の 今の土人池亀村と云 杉菴に幽棲しく后天授院を開基しありハ天授の文字ハ南朝第四代帝後亀山院 後醍醐天皇の季の皇子之 諱凞成王 即位の年号なり 北朝永和元年に当る 渾て年号をとりて寺号とする例多し又授とあるに授翁の授の字も高く用ひ給ひなんや天授を院号

自號に冠らせらく南朝の君恩を報ぜんとの名賢の驗なるべし往々の
古哲深く考へ給ふ義なるべし志りしながら　後西院の御時神光
寂照禅師の勅謚ありて其頃より顯れしなるべし特に近年明和四
年の春下野國都賀郡西見野村長光寺境内より堀出せし寶
器あり　左に圖をあらはす　然るに念波定次此宝器領主より
台覧に備へ　御紋の御櫃を賜ひ毎歳一度づゝ其領主より撿分ある
ようと命せられ　猶又妙心寺の末院江戸牛込濟松寺の吹擧に
よつて　官家へ申上らく今天授院に賜ふべく霊寶と称する時に百余
年の後までも忠賢を慶び徳を匿し給ふ事あれば隠逸のいさを
よろこぶなるべし龍逢比干が諫に死し伯夷叔齊が首陽を踏屈平
が漁父の辞もいまだし忠臣名賢の清淨无塵空虚自性の
月の光りなる其頃關山國師より外へ志られざる
かくれ給ふ

○天授院霊寶　藤房卿遺物四品

○明和四年丁亥正月廿八日下野國都賀郡西見野村長光寺（古ハ淨家宗後曹洞宗）境内山壞し跡より堀出を品類圖

紫銅塔



古鏡圖
表體



○系譜云大職冠鎌足六代閑院左大臣冬嗣公七男内舎人良門十二代經房 晧 定經 資經 爲經 經俊 資通 宣房 小路藤房 季房 云云

○貞國四年ハ南朝 後村上帝の即位の年號也 北朝康永元年ニ當る 後醍醐天皇崩御より五年の後也

圓徑 二寸八分
柄長 貳寸八分
柄幅 上 五分 下 六分

裏體



整衣冠尊瞻視
書言故事ニ出 整其衣冠尊其瞻視 朱晦菴敬齋ノ箴之語

○紫銅塔 圖のごとく塔内に正觀音一軀 ○古鏡一面 圖のごとし ○古錢九百九拾壹文

右塔ハ古錢ハ寫經一字三礼千部の數なりに聚てともに納めしもの也

但し此内掘出しける後缺亡錢十五文存在の錢九百七十六文各文字替あり此内四百七十三文文字分明なれども四十三文欠缺く四百六十文文字左の通

皇宋通宝 四十二文
至和通宝 五文
元祐通宝 八十文
煕寧元宝 四十九文
至元通宝 三文
元豊通宝 百十九文

元符通宝拾六文　政和通宝拾五文　祥符元宝廿二文
嘉祐元宝五文　開元通宝四文　嘉祐通宝壹文
淳化元宝壹文　咸平元宝五文　皇宋元宝貳文
天聖元宝廿八文　天禧通宝十貳文　紹聖元宝十六文
大平通宝貳文　明道元宝貳文　治平元宝十五文
景德元宝九文　至道元宝貳文　治平通宝貳文
宋元通宝壹文　宣和通宝貳文

○經文切　文字不分明共ニ都合貳拾七品　右古銭在壺中ニ掘出之時壺破壊矣
壺中にありし雲母紙ニ書寫の經文と相見ゆ
皆朽損じ殘紙わづかに此ヲ藏之
已上四箇品

万里小路藤房卿ハ幼よりおほくの書をもてあそひて上の御おほえふかく
ましまして朝臣にておはしけるが十七の春上より今年のちしめし祝詞は
まうさるべしと仰下されけるに金玉のをもて奏せられ武ハ幽玄を尽しけるに人々
詩をそはのう悩つられけるに藤房卿詩作をもくまゐられけり

春來品物都テ春容　木母花開テ香正ニ濃ナリ
今日太平三朝ノ且ニ家々　醉賞更ニ飛ス鍾
藤房

此詩をも御奏せられけるに龍顔特にうるはしく御車にてよかく
よろしくほとめ給むべしと文の口へ仰下されけるとぞ

授翁和尚自贊　此像妙心寺塔頭天授院の藏なり

朝遊夕處　威音王前　不立家國　坐断大子
無因無果　白日青天　七凹八凸　佛祖不傳
宗彌上人　授翁叟書
于見慶軒

應安初元八月

按るにこの應安元年ハ延文五年の翌る年なり　授翁和尚の入寂ハ後醍醐天皇崩御より廿三年の後之又関山國師遷化より二十年後之
贊印天澤東胤録云

徽號勅書云　況又藤房者王佐才鳴於世間矣

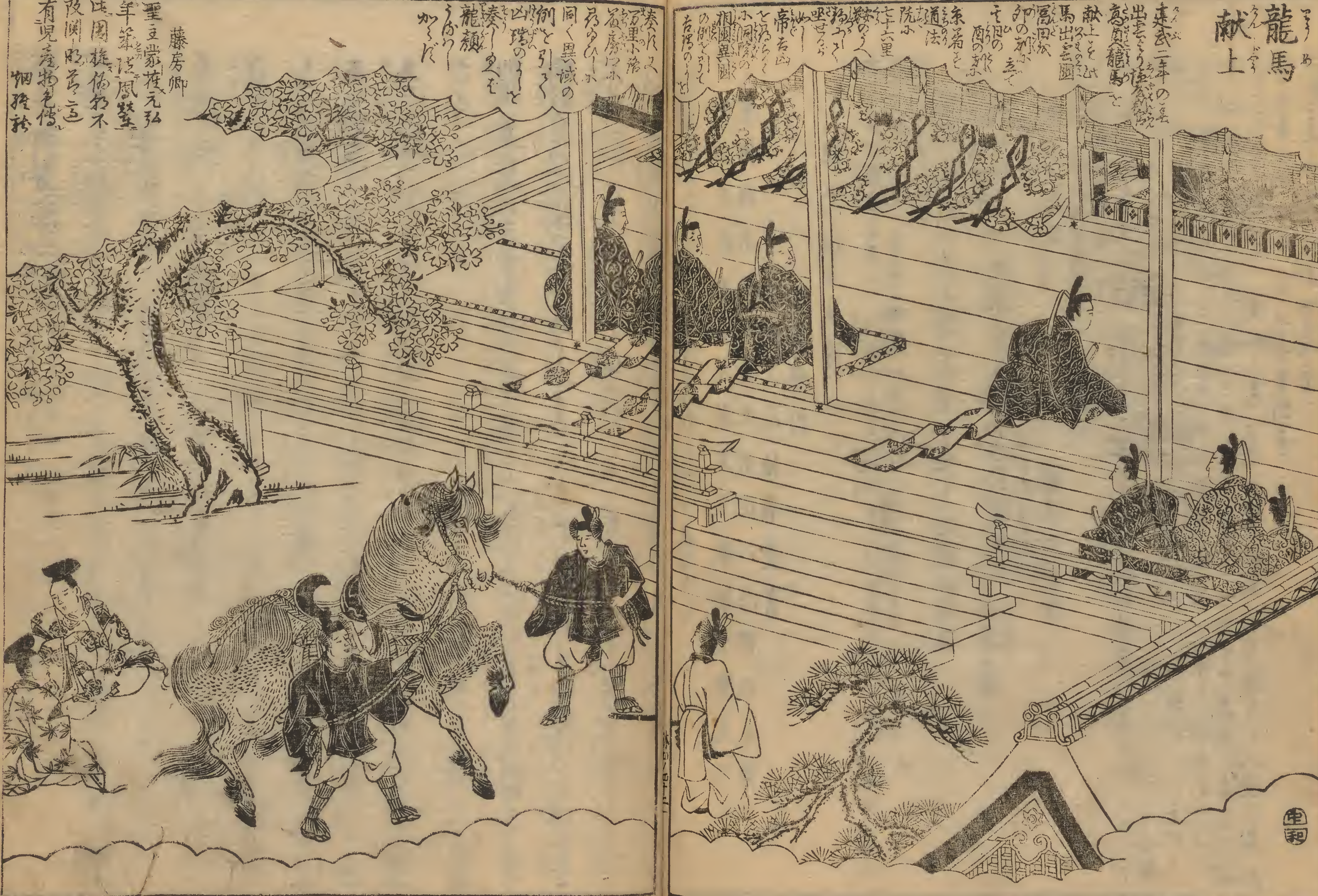
元政枝桑隱逸傳云
藤房卿為僧嗣関山之法授翁宗弼是也　出家年歴不記

如常六祖傳云
藤房卿出家　四十二

卍元延宝傳燈録
藤房卿出家　三十八

高泉枝桑禪林僧宝傳云
藤房卿出家　三十八

藤房卿出家し給ふ年紀つまびらかならず　按るに石清水還幸の道より北岩倉に
至り給ふは建武二年三月なり　此年の七月足利左馬頭
直義朝臣伊賀の國にて大塔宮護良親王を殺害し奉り又
此翌る年延元元年五月にハ楠正成討死し
かく時変を見て出家し給ふとみえたり
よりかく考ふれば建武二年ならば四十五年なり
八十五歳の中なれば四十五年を引て
出家し給ふ年四十歳なるべし


龍馬献上
建武二年のころ
出雲より塩冶判官
高貞龍馬を
献上せしに
馬出雲国
冨田が
卯の刻に出て
其日の
酉の刻に
京着を
道法
既に
七十六里
安のうへ
勝れて
坐せるが如し
然ども
帝吉凶
を諸らせ給ふに
洞院の
相国異国
の例を引て
吉瑞のよしと
奏しける又
万里小路
藤房卿は
同く異域の
例を引て
凶瑞のよしを
奏しけるが
龍顔
うるはし
からず
藤房卿
聖主蒙塵元弘年
筆陪鳳輦
此国捷偏猶不
改関路若道
有児産物争伝
[illegible]

○藤房卿髪塚　北岩倉大雲寺観音堂に登る石階の東寺町辞林の中に石塔婆あり高さ二尺余

傳聞むかし初妙心寺に住せし樹下庵祖芳といふ僧あり此人彼卿の古墳を尋ん
とて此岩倉のほとりを逍遥する小路の側に藤房の髪塚といふ小さき標札あり
叢林中に入て見るに荊棘おひしげり蔓草蒼苔露ふかく埋もれて開く事を得す然れとも
文字もなし此標札を建し人誰とも便あるべしとて彼これの人に尋ぬれとも曾て知る人
もあらず因茲彼人哀を憑みて一七ヶ日の歩を運びて観音へ祈誓し侍るに当寺に満る
毎に此古墳を拝し尊前に詣る日法螺の老人常力し黒き羽織を着して出
来て古塚の礼拝をする事家珠勝之祖芳師嘻しくおもひ早く其寄向て此石塔婆
ハ何なる人の塚なるぞと問れば老人答て万里小路藤房卿の髪塚なり此地ハ不二房の
旧蹟也其ハ当山岩倉實相院宮の候人上河原氏といふ者なりし藤房の旧蹟とて年
御殿の旧記に残り又ちかきに今より二千年前暴風烈しき時此塔の下根の墓る
大木の松倒れて此時塔も倶に折れて其下石より二寸目の石空虚にて其中
に銅の筒長サ五寸直四寸許あるが此く筒中に髪あり故に髪塚也
此事旧記に符合して明白なれハ近年新標札を建立して詣人に知らしむ祖芳師
大に怡悦して大悲の霊應なりとて感謝し其の榛荊を拂て遂に
天授院より碑を建られたり　此石塔山州名跡志に瘧塚と号て瘧を疾む者まれに祈まば忽癒ると書す

碑表

万里小路中納言藤房卿髪塔　十二字

記百八十字

記曰

山城州北巖倉大雲教寺封境不二房舊
址有一基石浮圖傳言藤房卿髪塔往昔
建武甲戌之冬藤房掛冠遁蹤岩倉禮於
不二房法一雖髪自爾鏟彩韜光居無定
處此塔久歷星霜古貌巋然藏髪銅筒安
塔之中央竊惟法一追感藤房賢德建之
乎藤房東傦鹵練後登洛西正法山受闕
山國師衣法遂為妙心禪寺第二世諱宗
弼字授翁敕謚神光寂照禪師是也今
恐荆榛荒凉不可識彫刻片石記其槩畧
以為後標

寛政二年庚戌三月廿八日

祖芳焚香謹識

石工　左京　今津庄三郎刻之

太平記云 藤房卿 後醍醐帝に仕へ諫奏旨に忤ひあれバ竊に北山の岩倉に遁れ薙

髪して不二房と号す首座を戒師とし 帝悔て又宣房をして是を追しむ藤房

此暁岩倉を去ぬ宣房到つても不二空房のミ残りをりされど和哥あり

住なれし山を浮世の人とはゞあらしや庭の松にこたえん

此和哥は丹波国を去りし時によミおきし書ありて藤房卿の真蹟は江州横田川のほとり

妙感寺の什宝とせられたり 太平記の作者此和哥を岩倉不二房に出したり

然れども藤房卿丹波に来つて剃髪し其暁直に出去ありしを住なれし山の五文字

翻翻せり 後考をまつべく

吉田兼好云

藤房卿蓑笠山にて畑ハ弟左近時能是をまつせて其後一条少将を伴ひハ入道へ

おもし又浮世の人に向ひてれを捨りし雲に宿りと見えてん

一条少将其跡をよく見ありしかど年月を合せてミれバ君の住宿と云るれ

しる後の事へ藤房卿の方より筑紫へ通りあつてん折あや其後ハ絶て御音

信も聞ざりし

○退蔵院 当山三世無因宗因和尚開基にて日峯和尚中興にて初メ波多野

出雲守無因の為に建立し庭中ハ画聖古法眼元信の

此附藤房卿ハ足羽黒丸の城に合戦ありて千戈の声止む附なし 藤房卿乱を避ありく

足利遠江守の手に藤房卿ハ所ざるほどなるかおぼつかなし

他にあり 他の此院にかつかし

○善源院 当山第四世 日峯宗舜建立

○如是院 当山第五世 義天玄詔建立

○衡梅院 当山第六世 雪江宗深建立 天秀方丈営次 真野蔵人 判金五枚を喜捨しく助之 其子孫駒田権之済仕フ松平

伊賀守殿 当院の庭中寺にあり

右 微笑庵已下当山六祖としるす

△龍泉庵 景堂 創建

△東海庵 悟渓宗頓 創建 開山塔

△霊雲院 特芳禅傑開基 当庵 桂林 石谷 掃部 建立

霊雲院ハ曽て皆むくかの所は大体和尚退蔵院庭の画ミな古法眼乃筆と今に伝ふ

の後其戸を閉て猥に人の出入を許さず 故に大体和尚の画を今に傳ふ

此附古法眼の画多く人の為に偸取られし故に 此年五六十年の間に

又云 天和三年 霊元帝 古法眼の書を叡覧あり 偃渓の賛 李龍眠の

三幅対を叡覧ありて庭中の山水ハ子細あり建られし書院ハ通人龍安

とひへ者ありて作り山水ハ妙喜庵も亦此書院を写しく建つ

其後金森宗和此書院を模しく加州の太守に奉れり 故に今に於て

霊雲院と同形とぞ云


妙心塔頭
退蔵院
此林泉ハ狩野古法眼作りしと云


眞乘院
芋吟僧都
芋の名れ
月ふゆかりぬ
光りる
文暢
喰芋説法
播種法筵ニ
説法盤中ノ
顆々積為堆ヲ
厥難名利ニ
弁空法功ヲ
山房摸芋魁ニ
畑維龍
文鳴


いもかしら
いちや
この世ふ
生れてる
七十九歳
大江丸
狂詩
飛錫高僧好芋魁
沽鐘沽坊寶銭
堆一瓶一鉢禪
維芋水月入空
生芋臺
籬嶌

Bamboo screen over window



妙心塔頭 春浦院

山林泉水虎溪を編むといふ竹窓ニ簾冨といふ名画あり世ニ其名高し

○聖澤院 天蔭和尚創建東陽和尚を勧請して開基次

右四派祖

○大通院 開基ハ湘南和尚也此人ハ初メ土佐国守の息にして山水の勝景と座中に造る事を好み奇石奇木を諸邦より聚め此事多し一葉書院紀州禅林寺来山和尚に奉じ奇樹異岩を採る来正法誌に見へより座中の風趣当山第一にして二小双にそのかし方丈の画ハ海北友松書院の襖猿猴の圖竹林の雀影ハ都て狩野探幽筆なりひハ主馬尚信の筆なり

当院の檀越ハ松平土佐侯也

○蟠桃院 当院の林泉に奇石名岩多し客殿の画ハ花鳥又三国志墨画海北友松側に狩野永徳の画あり墨蘭の中門ハ初メ聚楽館にありて彫物名作也伝云左甚五郎が彫所とぞ当院ハ松平陸奥守殿檀越也

○雑華院 林泉ハ名庭にして奇石珍しく十六羅漢有准へ釈尊大会の体相ハ表に明巌宗従丞郷乃作也

襖の画ハ花鳥にして海北友松の筆也

○海福院 一宙和尚を勧請して開基とす檀越福島左衛門正則書院の襖唐紙の上に探幽法師酒狂して墨画にて猿猴の圖を画く住持愁ひて帰るに新しき唐紙に猿の墨画を書事不敬の至りとて大に憤りて叱らるゝ故探幽法師かくして恥入りて其勢力に感し画工の規範とも成て後世まで賞しくせ寺の名物と成

又客殿の画ハ山水唐子遊百花 九四才 きれみか狩野興意の筆なり

○桂春院 林泉妙境なり 檀越石河蔵人

○大鑑院 林泉京師庸軒の作 檀越八丈宗丞

○麟祥院 妙心寺門前の東木辻村にあり寛永十一年建立 檀越稲葉丹後守侯 当院ハ稲葉春日局の菩提所にして御魂舎を後水尾院の御殿を当寺に移されしとぞ内の繪ハ狩野古右京の筆なり方丈に釈迦佛を安置す運慶の作也伽藍ハ朝鮮人より献ドりとて阿羅漢ハ新作額ハ朝鮮梅源の筆内の襖の画ハ海北友松書院の画ハ狩野探幽の筆也

△護天神祠 麟祥院鎮守にして境内の東北にあり縁起云むかし正暦年中源頼信の勅を奉じて叛族を退治に出陣の時霊夢あり内裏の西の方菖蒲小路の辺にて天満神現じ頼信に告て宣く早く凶徒を退治に越べし我加護すべしと云終りて夢覚ぬ依て神勅に任せ出陣ありて一戦に凶徒残らず誅し依之ちに天満神の社を営み参議正つねのり卿部当に補せられ永く護天神と称じ星霜移りて今ハ当院の鎮守となりて毎歳大般若経転読あり今時世人志る事稀なれども霊験日々に新にしてむかしも今もかわらず光同塵なり

○春浦院 旧跡の南車街の西側にあり 檀那一柳土佐侯

当院方丈の画は都て雪溪の筆也又林泉ハ虎溪の三笑を象りて妙
景なり又此院の什宝に猶富と名付る戯画の軸あり
妙筆にして画師詳ならず放屁往昔の土佐家の筆威を習ふる
多く鳥羽僧正の書れし放屁軍に似たり少しく上へ文勝る
ありておかしく面白く筆席上に大笑ひを催す名画之時を
高貴摂家へも上覧に備へ世に名高し

○大光院

同所東側にあり

林泉妙境之

其外妙心寺境内塔頭都而八十余寺あり何れも高貴諸侯家
の菩提所にして林泉の風流あるひは名画名筆記を号
繁冗限なし故に号も器財見聞の
繁を省くた著をのぞく

芋喰僧都旧跡

妙心寺小門内封境を所許にせり直乗院といふ仁和寺
の末院あり此院主盛親僧都といふ者芋を多く食して
修道修行ありよしつれ〴〵草に書られりいにしへは妙心寺の境内狭小
なり花園法皇仙洞を建させ玉ひし已後ハ関山国師僅なる草庵にて
閑居し玉ふに居の屋根破れくるしりたれば和尚目笠を被き坐禅し
あひたり此附国師の故郷信州の人訪ひ来り此体を見て笑止にそひ
金を持出しこれにて草菴を修補し給へとて国師これを見て大に
怒り汝ハ何事を語ふにあらず庵室の弊を繕ふ早く立去る為しと
金とともに外面へ投出され此人投られながら言下に悟道して国師
の法弟となり兼深を賞して慇懃に礼拝し帰られたりとぞ
つれ〴〵草曰
真乗院に盛親僧都とてやんごとなき智者ありけりいもがしらといふものを
このみておほくくひけり談義の座にても大なる鉢にうづたかく盛り

てひざもとにおきつゝくひながら文をもよみけりわづらふ事あるには七日
二七日など療治とてこもりゐて思ふやうによき芋がしらをえらびてことにおほく食て
よろづの病をいやしけり人にくはする事なし唯ひとりのみぞくひける極めて
まづしかりけるに師匠死さまに銭二百貫と坊ひとつをゆづりたりけるを坊を
百貫に売てかれこれ三万疋をいもがしらの銭とさだめて京なる人にあづけおき
て十貫づゝとりよせて芋がしらをともしからずめしけるほどに又こと用にもちゐる
ことなくて其あしみな失にけり三百貫の物を貧しき身にまうけてかく
はからひける誠に有がたき道心者なりとぞ人申ける此僧都或法師を見て
しろうるりといふ名をつけたりけりとはなにものぞと人の問ければさるものをわれも
しらずもしあらましかば此僧の顔に似てんとぞいひける此僧都みめよくちから
つよく大食にて能書学匠弁説人にすぐれて宗の法燈なれば寺中にも
おもく思はれたりけれども世をかろく思ひたる曲者にてよろづ自由にして大
かた人にしたがふといふことなし出仕して饗膳などにつくも皆人の前すゑわたさ

さだまれる友のかなふをくぬれどやのくひとゝもうちそひてゆうたなれバ
ひやうり津へもちてゆきたりしに非道にも人にひとしく定てくだりつる云ひ
これは夜かうにも曉にもそひて神つくれバ足もうけこりていちある
大事あれども人のいふ事きゝいれど目覺あれバく夜もいとぞんとさなる
してうきふたりきかとの津へ有るぬさなるあれど人手かゝつれ若
し後川ゆるされたり徳のつてれつきるにや

大應國師塔 妙心寺の東五町許安井村竹林の中にあり此地原國師の開基龍翔寺の旧蹟之寺ハ應仁の兵火にかゝりて近年龍翔寺の文字れ古跡と称し次今る紫野大徳寺塔頭の中に寺號を移して再興に及ぶ則大徳寺の開山大燈國師の師之入宋して虚堂和尚に法嗣を本朝達磨宗の大徳なり

傳云大應國師諱ハ紹明字ハ南浦駿州安部郡の巨族藤氏の子之幼して駿州建穂寺淨辨に事て法の出世を學び年十五にして薙髪し具足戒を受鎌倉建長寺蘭溪隆和尚に參禅し正元の頃宋國に入て偏く諸山を訪ひ時に虚堂和尚淨慈に投ず道風高峻學者敢て其門に登ること希なり南浦參謁して機鋒相契ふ虚堂大に歡んで賓客に典しむ日夕咨扣ゝ一日虚堂の頂相を攜して讃を請ふ虚堂書して曰

紹既明白語不失宗手頭簸弄金圏栗蓬大唐國裏無人會

文永八年太宰府崇福寺に止錫すること三十三年參徒日々に盛之嘉元の間詔を奉て京師に入 太上皇 後宇多帝 召て宮掖に對し問答叡意に稱ふ 勅を下して萬壽禪寺を主とらしむ延慶元年臘月廿九日忽微疾ありて頌を書して曰

訶風罵雨佛祖不知一機瞥轉閃電猶遲

書し畢て加趺して遷化 世寿七十四歳 上皇哀慕して已に勅して圓通大應國師と謚ある寺を右京に営て額して龍翔と號し塔を後山に築て普光といふ



一休和尚年譜云

寛正二年ノ春遊ニ嵯峨ニ路経西京ヲ入テ拝ス龍翔ノ之塔ヲ荒涼タル僧炊堂宇頽歟昭堂ハ特ニ龍山ノ所營テ而獨無シ恙庫院最ヒ廢ス

狂雲集　感龍翔廢寺ヲ

常住物誰カ用ニ己身ヲ山門ノ境致剪ル松筠
殿堂ハ只與ニ花零落ス廢地ノ秋風二月ノ春

後宇多院塔　大應國師塔の左に双ぶ御髪を藏むといふ

賀陽門院塔　安井村龍翔寺古跡竹林の中にあり五輪石塔婆なり是門院ハ後嵯峨院皇女齋院准后御母ハ内大臣信清公の女也龍翔寺境内ハ初メ賀陽門院の御所也荒廢の後大應國師の徒弟此地に移く國師の塔所とす

鹿苑寺　平安の北にあり世に金閣寺といふ原ハ西園寺家の廢蹟也足利三代義満公の別業なりしが後遺命によりて寺とし夢窓國師を開基とす應永年中時の天子あまたゝび行幸ありし所也樵葉記及び小山北山記に見えたり　林泉に三重の金閣あり露盤に鳳凰を立上を究竟頂といふ中に潮音洞下を法水院といふ總て金箔をおく故に金閣の名あり　池を鏡湖といふ九山八海石あり御茶水と銀河の泉とて龍門瀑に鯉魚石あり安民澤に外龍石あり明王院に石鐫の不動と安次茶に激え水あり老目ぬ杯を鎮るとぞ實に此閣ハ彼漢宣帝の營みし麒麟閣にも比せんや


其二
春日社
銀河泉
岩下水
夜泊石
九山八海石
夜泊石


衣笠山
畠山石
赤松石
鏡湖池

○足利三代将軍義満公ハ延文三年八月廿二日京都に誕生す童名を春王といふ應安元年十二月征夷大将軍の宣下あり永和四年室町に花亭を移て室町殿と号す館内に名花数多の株を樹る時の人花の御所といふ同十二月従二位に叙す同二年に従一位に叙し御直衣初あり永徳二年正月左大臣に任す同年将軍家紀州和歌浦に遊び又富士山に赴く應永元年将軍を長子義持に譲り義満公太政大臣に任し兵仗宣下あり　世に傳ふ義満相国に任せんと請ふ朝廷これを許さず故に義満公家の領地を押領し義満自国王と号す細川を摂家とし畠山を清華とし朝廷を廢せんとす　あまりに依て朝廷大に驚て大相国を勅許に　應永五年六月鹿苑院に三重高閣を営む同六年相国寺に七重大塔を建る金閣へ退居より北山殿と称す大明皇帝書を贈て黄金一千両を寄る書ハ参議菅原秀長草す應永十五年五月六日前征夷大将軍太政大臣従一位准三宮義満公北山亭にて薨す　年齢五十一　鹿苑院殿と号す　勅使来吊　太上天皇の号を贈らる嫡子義持是を辞す大明帝より祭文を作て恭献王と賞す

都林泉名勝圖會巻之四　尾